

一般演題

1. ^{123}I -IMP の集積を認めた Meningeal melanoma の 1 例

村田晃一郎 岩田 雅巳
(北里研メディカルセ病院・放)
高野 尚治 斉藤 元良 (同・脳外)
大部 誠 (同・病理)

脳腫瘍のなかでも稀とされる原発性頭蓋内悪性黒色腫を経験したため、その画像所見を中心に報告する。症例は、頭痛にて発症した 34 歳男性である。脳神経学的に異常はなく、血液・尿一般検査、腫瘍関連マーカーも正常であった。頭部 CT 検査では、中頭蓋窩に接する 3×3 cm の高吸収領域を認め、周囲に脳浮腫を伴っており、造影効果は軽微であった。MRI では、T1 強調像にて高輝度を呈し、T2 強調像にて腫瘍部分が無信号の特徴的な像を呈していた。また、冠状断像では中頭蓋窩に広基性に接し脳実質を上方に圧排しており、髄膜関連の腫瘍と考えられた。

^{123}I -IMP による脳血流シンチグラムでは、腫瘍部分に強い取り込みを認め、15 分像よりも 2 時間像にて集積が強くなっていた。手術所見では薄い被膜を有する半球状の腫瘍で中頭蓋底でシート状にクモ膜下腔に移行し、脳溝に沿って浸潤していた。病理では、脳軟膜原発の悪性黒色腫であった。

2. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -SQ30217 による心筋血流シンチグラフィ—特に ^{201}Tl との比較において—

橋本 順 久保 敦司 塚谷 泰司
中村佳代子 橋本 省三 (慶応大・放)
岩永 史朗 半田俊之介 (同・内)

虚血性心疾患もしくはその疑いのある 20 例に、新しい心筋血流製剤 SQ30217 ($^{99\text{m}}\text{Tc}$ -Teboroxime) を投与し、その結果を検討した。

運動負荷・安静時 2 回投与を行い、負荷 Tl, 心臓カテーテル所見と比較したところ、Tl シンチグラフィとの所見の一致率は高く (約 85%) Tl と比べ sensitivity, specificity に有意差はなかった。planar 像では高率で下

壁と肝臓との重なりを認め、5 例では SPECT 像でも重なりがあり、うち 4 例で SPECT 短軸像にて artifact と考えられる肝に接する下壁の欠損が見られ読影上注意を要すると思われた。一方、連続撮像にて、虚血部と健康心筋部との washout の差から虚血を短時間かつ鋭敏に検出できる可能性も示唆されている。

3. 3D display 法による Tc-99m MIBI 心筋シンチグラム

鹿島田明夫 町田喜久雄 本田 憲業
間宮 敏雄 高橋 卓 滝島 輝雄
釜野 剛 村松 正行 井上 優介
(埼玉医大総合医療セ・放)
伴 隆一 (島津製作所)

16 例の陳旧性心筋梗塞患者に対し 3D display 法による Tc-99m MIBI 心筋シンチグラムを施行し、病変部位診断能について Tc-99m MIBI SPECT との比較検討を行った。回転型ガンマカメラにて 64 方向の撮像を行い、断層像は Shepp-Logan filtered back projection 法にて、3D 像は depth-shading 法により再構成された。読影は 4 人の放射線科医の合議により施行された。Tc-99m SPECT および 3D 像の病変部位診断能の sensitivity および specificity に差はなかったが、3D 像は SPECT 像に比し、RI 欠損像の直観的診断が容易であると思われる。3D display 法は左室壁の血流欠損像の診断に有用であることが示唆された。

4. ガリウムシンチグラフィと CA 125 が有用であった悪性腹膜中皮腫の 1 例

方波見卓行 堀内 規 磯部 穂積
中村 芳正 加藤 義郎 高橋 利明
星 賢二 辻野大二郎 斎藤 宣彦
染谷 一彦 (聖マ医大・三内)

症例、69 歳女性、悪心・腹満感を主訴に受診し、腹水を指摘され入院。蛙腹と右側腹部腫瘤を認め、血清・腹水 CA 125 が著明高値、腹水細胞診 Class V, Ga シン